

ペテロ第一1章13-25節 「救いを受けた者」

1A 聖なる生活 13-16

1B 再臨の時の恵み 13

2B 聖なる方の召し 14-16

2A 贖われた生活 17-21

1B 公平に裁かれる方 17

2B 尊い血による代価 18-19

3B 世の始まる前からのキリスト 20-21

3A 愛し合う生活 22-25

1B 偽りのない兄弟愛 22

2B 朽ちない種 23-25

本文

ペテロへの手紙第一1章 13 節を開いてください。私たちは前回から、ペテロの第一の手紙を学んでいます。小アジアにある教会に対して、迫害下の中にあるキリスト者たちに対してペテロが励ましの言葉を語っていることを見えています。ペテロは、ユダヤ人に遣わされた使徒と呼ばれていましたが、異邦人の多くいるアンテオケにも言っていますから、ユダヤ人だけに福音を語ったということではありません。事実、コルネリオに語りました。しかし、ユダヤ人に主に語っているために、旧約聖書の背景が色濃く出ています。これから見ていく箇所もそうです。

1A 聖なる生活 13-16

今回は、神が私たちに与えられている救いがいかに優れたものかを、ペテロは教えていました。それは、イエス様の復活に基づくものであり、生ける希望です。神から与えられる遺産は天に蓄えられており、それは朽ちることも、消えることもありません。したがって、私たちは試練の中にあっても悲しまなければいけないけれども、キリストが再び戻ってきてくださいます。その現れの時には、その信仰が称賛と光栄と栄誉をもたらす、と約束しています。魂の救いを受けているので、イエス様を見てもいないのに信じており、栄えに満ちた喜びに満ちています。そしてそれが、旧約時代の聖徒たちが御霊で啓示を受けていたけれども、自分たちのためではなく、この時代の私たちのためだったと示されていました。

このようにペテロは話して、それで私たちがその偉大な救いはいかに応答すべきかを、教えています。13-16 節までは、「聖い生活を歩む」ということです。17-21 節までは、「贖われた生活を送る」ということです。そして22-25 節までは、「愛し合う生活をする」ということです。

1B 再臨の時の恵み 13

13 ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。

ペテロは、イエス様が間もなく来られること、再び現れてくださることを、再び話しています。5 節に、「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。」と言っています。イエス様が私たちに与えられた救いを完成するために、戻って来られます。

そのことを思って、まず行なうことは「心を引き締め、身を慎み」とあります。「引き締める」という言葉は、エペソ 6 章の「真理の帯を締める」という霊の戦いの時にも使われますが、男が布一切れできている服を腰のところにまくり上げて、仕事をしたり、戦いをする時に帯を締めるのです。おそらくペテロは、イスラエルの民が、神がエジプトに対して最後の災い、初子の死をもたらす時に、すぐにエジプトを脱出できるように過越の食事をとる時の姿勢を考えているのだと思います。「出エジプト 12:11 あなたがたは、このようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を引き締め、足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは主への過越のいけにえである。」彼らがエジプトを出ることによって、その災いから免れることができるのと同じように、イエス様が来られることによって、神の怒りから私たちを救ってくださいます。ですから、しっかりと思いを引き締めていなければいけません。それから、「身を慎み」と訳されていますが、「酔わない、しらふのままにしておく」という意味です。つまり、他の影響を受けないでいるということであり、イエス様が現われてくださることから、他の世の欲や思い煩いへの引きこまれることがないように、御霊に留まり、自制の実を結ぶということです。

そして、イエス様の現れの時は、「あなたがたにもたらされる恵み」とあります。神の怒りではなく、むしろ神の怒りからの救いを経験します。私たちは、罪人であったのに救われたという恵みは、過去だけのものではなく、将来にまで及ぶということです。主の現われの時に天に引き上げられ、この方に見えることは、そんな価値がないのに受ける光栄であり、全くの恵みなのです。

2B 聖なる方の召し 14-16

14 従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。」と書いてあるからです。

ペテロは先に、私たちが父なる神によって、キリストの復活の命をもって私たちを新たに生まれさせたと言っています(1:3)。私たちが、神によって生まれたのです。したがって、私たちは御霊に

よって神を、「アバ、父」と呼ぶようにされているとローマ 8 章に書いてあります。

そこで、私たちが救いを受けた後に求められているのは、「従順な子ども」になることです。従順とは、神を信じて、その言われた通りにする、ということです。たとえ自分の思いや気持ちがそう言っていないくとも、ただ父が言っているということだけで、従うのです。私たちには、感情が与えられています。感情は絶えず、私たちにこれをしろ、あれをしろと教えてきます。けれども、神の真理があります。私たちの祈りは、知っている神の真理に自分を合わせていき、その感情に流されないことです。そして、知性も絶えず、こうすべきだ、ああすべきだと教えますね。自分が知っていると自負していることがあります。しかし、神の真理がこうであると教えるのであれば、自分の悟りに依らず、信仰によって踏み出すのです。

そして、子が父に従順になる時にすることは、「倣う」ことであります。「あなたがたを召してくださった聖なる方にならって」とあります。父が聖なる方、被造物から別たれた方、汚れから別たれた方なので、その方に倣うということです。

まず、「以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず」と言っています。神を知らなかったので、知性が暗くなり、さまざまな欲望にただ従っている者でありました。「エペソ 4:18-20 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。しかし、あなたがたはキリストのことを、このようには学びませんでした。」しかし、それは新しく生まれた今は、過去のものとなりました。そして、聖なる者となるのです。

イエス様の現れを思う時に、そしてキリスト者の大きな召しを思う時に、その主なことは「聖め」であります。いろいろな困難や試練があり、生活においていろいろなことが起こりますが、主は結局、「火を通して精錬」することをしておられるのです。信仰に深みを、信仰に精錬を与えるためにそれを許されるのです。そして、「あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。」と話しています。生活全般であります。聖なる神に倣うことは、生活のあらゆる場面にお呼びなさいということでもあります。

ペテロは、この教えを旧約聖書に基づいて話しています。「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならぬ。」というのは、レビ記 11 章の最後に出て来る言葉です。主によってエジプトから救い出された民は、生活のあらゆる面において聖なる神に倣って、聖なる者となるように命じられました。これがレビ記の教えの主題ですが、この 11 章は食物規定が書かれてあるところです。食べる物という生活のど真ん中にあるものをも、全てにおいて聖なる者となるように召されていました。

2A 贖われた生活 17-21

1B 公平に裁かれる方 17

17 また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごさない。

私たちが父とする神は、公平な方であります。ここでの公平は、「面子を受けない」という意味があります。人の顔を見ない、顔色を窺わないということです。主は、全く人から印象付けられる、印章によって影響を受けることはない、ということです。「申命 10:17 あなたがたの神、主は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。かたよって愛することなく、わいろを取らず、」とご自身を示されました。当時のユダヤ人は、自分たちはただユダヤ人ということだけで、救われていると思っていました。その欺きを粉碎するために、例えばバプテスマのヨハネは、「マタイ 3:9『われわれの先祖はアブラハムだ。』と心の中で言うような考えではいけません。あなたがたに言うのが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。」と言いました。パウロは、こう言っています。「ローマ 2:9-11 患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上により、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。神にはえこひいきなどはないからです。」

そこで、「人をそれぞれのわざに従って」公平に裁かれる、と言われます。他の人々がどうであるかどうか、は関係ないのです。結局、一人一人が神の前でどうなのか？ということが問われているのです。私たちはしばしば、物事を裁こうとします。人を裁こうとします。しかし、全ての裁きを主に委ねます。そして、ただ自分自身を主が裁かれるということだけを見つめればよいのです。「ローマ 14:10-12 それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。」

ですから、「恐れかしこんで過ごさない」と教えています。その時に、「地上にしばらくとどまっている間の時」と言っています。1章6節に、「いまは、しばらくの間」とあります。いつまでも続くのではない、ということです。なぜなら、2章11節にあります、「旅人であり寄留者である」からです。

2B 尊い血による贖い 18-19

そして私たちが、父なる神の威厳をして恐れかしこむように生きるのは、私たちがどれだけ尊い対価が支払われて贖われているのか、それを知っているということにあります。

18 ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や

金のような朽ちる物にはよらず、19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によるのです。

「贖われる」というのは、「買い戻される」という意味です。または「身代金を支払う」という意味もあります。イスラエルの民が奴隷としてエジプトに売り渡されているところを、主が彼らを過越の子羊の血で贖い出してくださいました。ここでは、何から贖われたとあるでしょうか？「あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方」であります。生ける神とキリストにあって共に歩む、その生き生きとした交わりではなく、先祖から言い伝えられたもの、律法についての言い伝えについてであります。ただ、そのことを行なっているのですが、なぜそんなことをしているのかが、分かりません。そして言い伝えは、人の内を清めるのには何ら効力を持っていません。パリサイ人たちは食事の前に手を洗わない、市場から帰ったら体を清めてから食事をする、杯や水差し、器などを洗うなど、いろいろなしきたりによって神に近づこうとしていました。それで弟子たちが手を洗わないことを咎めたのです。けれどもイエス様は、責められました。「マルコ 7:6-8 イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。」ですから、言い伝えは虚しいのです。

そのような言い伝えから贖い出されたのですが、その対価は金銀ではありませんでした。イエス様の流された血でありました。金や銀よりも、人の命、いや神の御子ご自身の命そのものが身代金となったのです。これだけの高価な対価によって買い取られたのであるから、神の救いをないがしろにしてはいけなく、ということです。「銀や金のような朽ちる物」とありますが、これにはもちろん、イエス様が言われたことが含まれていることでしょう。「マタイ 6:19-20 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。」

この前の日曜日、聖日に、ある兄弟と話していました。使徒の働きにおいて、ペテロとヨハネが、足なえの男に対して、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。(2:6)」と言って、男は立ち上がりました。けれども、今、多くの富を持っているカトリック教会は、「金銀は私たちにある。だから、病院を建てたから、あなたはそこに行きなさい。」となっているのではないかと、ということです。これは切実な問いかけですね。イエスの名ではなく、他の物質で必要を補っては、私たちの信仰の尊さが無くなってしまいます。

そして、イエス様の血の尊さですが、「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血」とあります。レビ記において、神が受け入れられる動物のいけにえは、必ず、「傷もなく汚れもない」も

のでなければいけません。それは神が完全であるから、神の受け入れるものも傷や欠点があってはならないのです。これはもちろん、イエス様の罪なき人生のことを意味します。この方が全く罪を犯されなかったがゆえに、私の罪の身代わりになることができます。もし罪があれば、その罪のゆえ死ななければなりません。罪がないことで、初めて身代わりになることができます。そして、「小羊」とありますが、これは先に言及した過越の羊のことを指していることでしょう。その血が鴨居と門柱に塗られることによって、死の使いはその血を見て、家を過ぎ越すのです。それゆえ、子羊の流した血に、自分の命が拠っていたのです。

3B 世の始まる前からのキリスト 20-21

20 キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。

神のキリストにある贖いのご計画は、世の始まる前から知られていました。これが驚くべきことです。1章2節に、「父なる神の予知に従い」とあります。父なる神が予め知っておられて、キリストにあってキリストの血の注ぎかけを受けるように選んでくださっていたのです。その時が満ちたのが、約二千年前、キリストがこの世に現れた時です。「ヘブル 1:1-2a 神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。」

ですから、ペテロにとってキリストが来てくださり、私たちの罪のために死なれ、甦られ、天に昇られたということは、全て終わりの時に起こっていたことであり、それでイエスが再来するの、もう間もなくだと思っていました。「使徒 3:19-20 そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。それは、主の御前から回復の時に来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです。」私たちが同じように、主が死なれて甦られたのだということがつい最近であるかのように新鮮であるかどうか、そして主が戻って来られるのが間もなくだ、と切迫した思いをもっているかどうか、霊的に生きるための道であります。

21 あなたがたは、死者の中からこのキリストをよみがえらせて彼に栄光を与えられた神を、キリストによって信じる人々です。このようにして、あなたがたの信仰と希望は神にかかっているのです。

「死者の中からこのキリストをよみがえらせて彼に栄光を与えられた」という栄光は、キリストが天に昇られたことです。天に昇られて、あらゆる名にまさる名を与えられています。今は、天に留まっておられ、父なる神の右の座に着いておられます。そしてそこから、主なるイエスを神は遣わして下さいます。ですから、次が大事でね、「あなたがたの信仰と希望は神にかかっている」とあ

ります。ここが、私たちが、いつも試されることです。神を信じているのか？希望は神に置いているのか？であります。神ではなく、何か違うものに期待して、それがかなうように願って動くということがあるからです。問題の打開を図ろうとします。けれども、私たちの信仰と希望は神にかかっているのです。

3A 愛し合う生活 22-25

1B 偽りのない兄弟愛 22

22 あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい。

三つ目、「愛し合う生活」についてです。ペテロもヨハネも、またパウロも、この点を強調していました。なぜなら、これは主ご自身の命令だったからです。「ヨハネ 13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」ここで、イエス様は「わたしがあなたがたを愛したように」と言われました。互いに愛する前に、イエス様がどれだけ私たちを愛してくださったか、そのことを知って、感動して、応答して、それで互いに愛し合います。ですから、一にも二にも、イエス様の自分たちへの愛を知ることです。

ここでは、そのことが、「真理に従うことによって、たましいを清め」という言葉で表れています。真理に従うとは、福音の真理のことです。主がキリストにあってしてくださった、その福音の真理に従うことです。そうすると、御霊が私たちの魂を清めてくださいます。ゆえに、その新しくされた思いによって、「偽りのない兄弟愛」を抱くのです。偽りのない、と言っているのですから、偽りの愛があるのです。「1ヨハネ 3:17-18 世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」と使徒ヨハネが言っている通りです。けれども、どうやって偽りのないようにすればよいのでしょうか？真実をもって行なうことができるのでしょうか？これが、「真理に従うことによって、たましいを清め」ということなのです。どんなに愛そうとしても、福音の真理への服従がなければ、魂の清めがないので、その愛が偽りのものになってしまいます。「ローマ 12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。」

そして、「互いに心から熱く愛し合いなさい。」との命令です。芯から出て来るような愛です。そして、そこから出て来る愛は、熱いです。静かな火、御霊の火によるものです。

2B 朽ちない種 23-25

23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、い

つまでも変わることのない、神のことばによるのです。24「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。25 しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」とあるからです。あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです。

ペテロは再び、「新しく生まれ」たことについて話しています。真理に従うこと、魂が清められることは、神によって御霊によって、新しく生まれたからこそ起こることです。そして、ペテロは何度となく、「朽ちるか、朽ちないか」の比較をしています。天における資産は朽ちない、ということをお話しました。先に、金銀は朽ちるようなものだと話しました。なぜここに拘るかと言いますと、彼らが迫害の中にいるからです。迫害の中にいれば、財産を失い、家を失い、大切な家族を失い、自分の健康、そして命さえも失う危険があるからです。では、そのために信仰を捨てるのか？という、それら財産や自分の安寧は、いつか朽ちて、消え去るのだと言っているのです。けれども、迫害によってこれらのものを失っても、失わないものは朽ちないのだ、ということでもあります。

ペテロがここで、「朽ちる種からではなく、朽ちない種から」と言っているのは、次の「神のことば」につながります。すなわち、神の言葉は、朽ちない種のようなものであり、その種が信仰をもって聞いた私たちの心に植えられて、確かに消え去ることのない救いへと至るということでもあります。人の栄光や人の認めてくれる言葉というのは朽ちて行くけれども、神の語られた言葉は永続します。いつまでも変わることがありません。そして、生きています。多くの人が聖書の言葉があたかも変わるように話します。これらを今の時代に当てはめるために、少し変えないといけなくして、その解釈や定義を根本から変えようとします。いいえ、みことばは変わらないのです。しかし、そこに命があるのです。新しい力、新しい御霊の働きがあるのです。だから生きていて、変わりません。

そのことをペテロは、イザヤ書 40 章からの引用で補っています。「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。25 しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」であります。これらの草や花は、人の栄光のことを指しています。私たちが人の栄光を求めるとか、それとも神の栄光を求めるとかを問うことは大事なことです。使徒ヨハネは、信仰を言い表さないユダヤ人指導者たちのことをこのように話しています。「ヨハネ 12:42-43 しかし、それにもかかわらず、指導者たちの中にもイエスを信じる者がたくさんいた。ただ、パリサイ人たちはばかかって、告白はしなかった。会堂から追放されないためであった。彼らは、神からの栄誉よりも、人の栄誉を愛したからである。」

そして、「あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです。」と言っています。神のことばのうちでも、福音のことばを聞いてそれを信じたことによって、新しく生まれたということ。このようにペテロは、神のことばを知ること、そして福音のことばを聞くことを教えて、それを愛の発祥源としました。